

新学習指導要領
における学習評価の
基本事項

指導要録の様式が改訂され、 3観点での学習評価が求められる

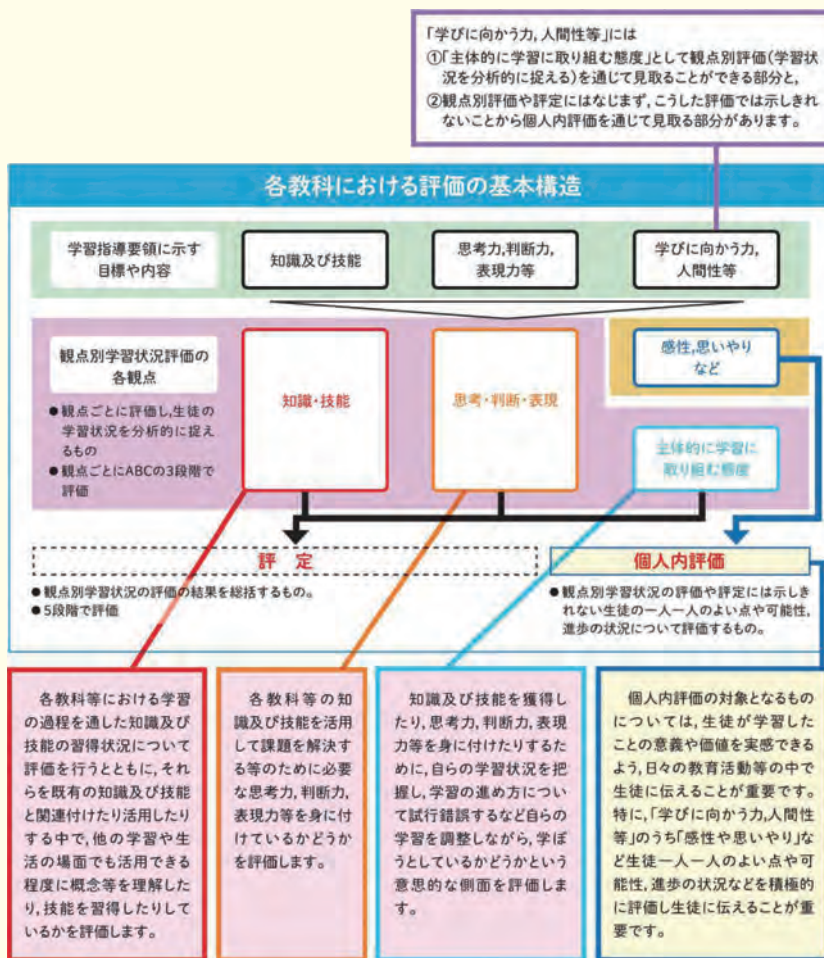
新学習指導要領では、生徒の学習改善や教師の指導改善につながるものにしていくことを目指し、学習評価の改善が求められている。文部科学省 国立教育政策研究所発行の「学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編」の内容などを基に、新学習指導要領における学習評価の基本事項を整理した。

生徒の学習改善や教師の指導改善に資する学習評価に

文部科学省は、新学習指導要領における学習評価の改善の基本的な方向性として、①生徒の学習改善につながるものにしていくこと、②教師の指導改善につながるものにしていくこと、③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくことの3点を示した。加えて、各教科の学習評価は、学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして学習状況を評価する「目標に準拠した評価」であるとし、集団内での相対的な位置づけを評価する「相対評価」とは異なるものだと明記された点も、改めて押さえておきたい。

観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）は現行課程でも行われて

図1 各教科における学習評価の基本構造



*文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編」をそのまま掲載。

新学習指導要領において「育成を目指す資質・能力」が3つの柱に整理されたことを踏まえて、各教科における学習評価も3つの観点で行われることになる。

そのうち、「学びに向かう力、人間性等」については、観点別評価を通じて見取ることができる部分と、観点別評価や評定にはなじまない部分があると示された。観点別評価や評定には示しきれない「感性、思いやりなど」は、「個人内評価」として、生徒一人ひとりのよい点や可能性、進歩の状況の評価する。一方、「主体的に学習に取り組む態度」は、評価の観点の1つとして、図2に示したイメージのように評価し、ほかの2つの観点の評価とともに指導要録に記載する。そして、「評定」は、観点別評価の結果を総括するものとして位置づけられる。

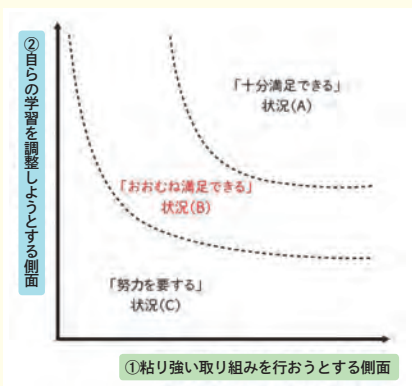
いるが、新学習指導要領において育成を目指す資質・能力が3つの柱で整理されたことを踏まえて、学習評価の観点も「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つに整理された(図1)。観点別評価は生徒の学習状況を分析的に捉えるものとし、評定は観点別評価の結果を総括するものとなる。

なお、「主体的に学習に取り組む態度」は、「粘り強い取り組みを行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」から評価する(図2)。

また、小・中学校と高校とは観点別評価の取り組みに差が見られることを受けて、高校の指導要録の参考様式にも、「観点別学習状況」を記載する欄が新設された(図3)。

今後、観点別評価のさらなる充実に向けては、従来の評価手法にとらわれず、視野を広く持つて評価のあり方を見直す必要があるだろう。直接評価(何ができるのか)と間接評価(何ができると思っているのか)、数値による評価と数値で表せない評価など、様々な評価手法を組み合わせて、生徒の資質・能力を多面的に見取り、彼らの成長に資する評価としたい。

図2 「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ



■ ①と②の2つの側面から評価する

①粘り強い取り組みを行おうとする側面

知識・技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力等を身につけたりすることに向けて、粘り強い取り組みを行おうとする側面のこと。

②自らの学習を調整しようとする側面

①を行う中で、自らの学習状況を調整し、学習の進め方について試行錯誤するなどの意思的な側面のこと。生徒がそれを主体的に進められるよう、自己評価・他者評価の場を設けることが重要となる。

「主体的に学習に取り組む態度」は、現行課程の「関心・意欲・態度」と評価の趣旨は同じである。しかし、挙手の回数やノートの取り方など、生徒の性格や行動面の傾向で評価をするものではない。①粘り強い取り組みを行おうとする側面、②自らの学習を調整しようとする側面から、生徒を見取することを指す。

そのため、①と②が知識・技能、思考力・判断力・表現力等の獲得に結びついていない場合、教師が机間指導などを通じて適切に指導することが求められる。

*文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編」を基に編集部で作成。

図3 高校の指導要録(参考様式)の変更点

各教科・科目等の学習の記録		第1学年				第2学年				第3学年				第4学年			
教科等	科目等	評定	修得単位数	学習状況	評定	修得単位数	学習状況	評定	修得単位数	学習状況	評定	修得単位数	学習状況	評定	修得単位数		
国語	現代の国語			AAA													
	略																
	歴史																

「評定」「修得単位数」に加え、「観点別学習状況」の欄を新設
「十分満足できる」状況と判断されるものは「A」、「おおむね満足できる」状況は「B」、「努力を要する」状況は「C」のように区分して評価を記入する。

「知識・技能」の評価の捉え方
現行の「理解」の観点も含まれる。例えば、ペーパーテストで、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスへの配慮、記述式問題や式・グラフで表現する問題の出題など、多様な方法を適切に取り入れる工夫が必要。

「思考・判断・表現」の評価の捉え方
3つの要素それぞれを、別々ではなくセットで評価する。ペーパーテスト以外にも、論述やレポートの作成、発表、話し合い、作品制作などの多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりして評価する。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価の捉え方
ノートやレポートなどの記述、授業中の発言、行動観察、自己評価や相互評価などが材料となる。各教科等の特質に応じて、生徒の発達段階や個性を十分に配慮し、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価する必要がある。

文部科学省が示した高校の「指導要録」(参考様式)では、「各教科・科目等の学習の記録」において、「観点別学習状況」の欄が新設された。評価の観点は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つ(図1参照)となる。各教科・科目の目標に基づき、学校が生徒や地域の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らして、生徒の学習状況を、観点ごとに分析的に捉えて評価し、記入する。

*文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)」を基に編集部で作成。